

自治産業コロニー「クズバス」とリュトヘルス(4) : ニューヨーク事務局の再編からその解散へ

山内, 昭人
九州大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7236532>

出版情報 : pp.1-26, 2024-09-26. Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



自治産業コロニー「クズバス」とリュトヘルス (4)

— ニューヨーク事務局の再編からその解散へ —

山内 昭人 (九州大学名誉教授)

はじめに

第1章 ニューヨーク事務局の再編

第2章 リースへのリュトヘルスとバーカーによる批判

第3章 バーカーの復帰から事務局の解散へ

おわりに

はじめに

本篇は、第2篇で取り扱ったアメリカ組織委員会（AOC）が1922年12月25日にソヴェト・ロシア政府（CTO）と自治産業コロニー「クズバス」（АИК-К）との間で締結されて新契約（第3篇，25；以下「新契約」と表記）にもとづき解散されることが決定したあと、^{ビュロー}ニューヨーク事務局の再編から1927年初めの解散（閉鎖）に至る経過をたどる。その中で、当事者間の対立の問題を論じ、とりわけ同事務局代表となったリース（Th. Reese）の管理者としての不適格性を論証する。さらに、後任となったバーカー（T. Barker）と彼を任命したリュトヘルスとの間の協力関係ばかりか、同時にあった意見対立の微妙な問題を可能な限り追究する。

ただし、以下の2点を予め断っておきたい。

① АИК-К 自体の「新契約」締結後から1927年1月1日をもって清算される経過は、次篇以降で取り扱われるために、本篇では当該時期に関係する事項については必要最小限の言及にとどめさせてもらう。

② ニューヨーク事務局代表リースが1924年2月末頃までに更迭され（たとみなされ）、バーカーに取って代えられてから事務局解散に至る期間に関する史料は目下極めて少なく、ガルキナ（Л.Ю. Галкина）やモレイ（J.P. Morray）の該当する記述もほんのわずかである。本篇では、リュトヘルス（S.J. Rutgers）の「クズバス年譜」中の記述と数点の史料を新たに加えることができたものの、それでも未解明部分が多いけれども、АИК-К のアメリカ関係組織を最後まで一括して扱うことにした。

第1章 ニューヨーク事務局の再編

АИК-Кの新経営委員会は、AOCを1923年4月1日をもって解散することを決定し、アメリカでの全作業を一時的にリースが代表して引き継ぐことになった（第3篇，32）。前AOC委員のバーカー，ムラリ（M. Mulari），そしてコスグローヴ（P.P. Cosgrove）は給与職員として引き続き働くことになった⁽¹⁾。

AOC議長を務めたキャルヴァート（H.S. Calvert）はどうなったかという点、『クズバス』記事によれば、彼は〔1923年〕4月1日、AOCを清算し、その業務を新経営委員会のリースに引き継ぐためにAOC会議を開催した。自らのクズバスとの関係を断つ意向を表明したキャルヴァートは、新経営委員会がAOCの業務に慣れるまで仕事を続け、4月28日にコロニーとの関係を断った⁽²⁾。しかし、キャルヴァート夫人（Mellie M. Calvert）のヘイウッド（W.D. Haywood）宛5月31日付書簡によれば、キャルヴァートは4月28日を待たず、早くも4月3日に退き、「セールスマンとしての仕事に再び就き、ボスが責任を取り、悩むところの立場にいることを気にかけるようには見えない」とある⁽³⁾。退く日としては早すぎるように思えるが、彼がきっぱり関係を断ったことだけは明らかなだ。その後「クズバス」に彼が関わることは、妻メリーの協力下で関係史料（第1篇，3）を後世に残すだけに終わる。

モレイによれば、離脱するまでにキャルヴァートは、東海岸から西海岸までおおよそ25都市⁽⁴⁾に一連の「クズバス・グループ」を設立しており、それらが募集の主要代理人を務めていた。特に多数を擁した州は、ペンシルヴェニア、オハイオ、イリノイ、カリフォルニアであり、またカナダのオンタリオ、ブリティッシュ・コロンビア両州も含まれていた。各地のグループには1ないし2個人が地元代表として、自らのグループに事の成り行きと必要度が周知されるよう責任を持って活動した。彼らはコロニーへの船積みのために資金、道具、書籍、食糧、衣類を集めた。彼らは志願者が自らの申請書を準備することや、集合地点（通常ニューヨーク）への旅の手配をすることを手助けした。これらのグループは、入植者によって〔様々な情報が〕伝えられた現地便りを読み聞かせる集会を催した。時たまニューヨーク事務所からの訪問者、特にキャルヴァートによる講演があった。彼は

(1) “Present Status, Labor Turnover and Kuzbas,” *Kuzbas*, Vol. 1, No. 12, 7.V.1923, 1-2. ムラリは、通常業務を担当していたスカイラー（M. Schuyler）がロシアへ向けて発つため（第2篇，28）1922年9月1日以降、会計係を引き継ぎ、事務用の小切手を振り出していた。

РГАСПИ, 515/1/4306/211.

(2) “H.S. Calvert Resigns,” *Kuzbas*, Vol. 1, No. 12, 7.V.1923, 16.

(3) РГАСПИ, 515/1/4299/437.

(4) 『クズバス』1923年2月20日号には27都市であった。*Kuzbas*, Vol. 1, No. 10, 20.II. 1923, 12.

これらの本部から遠いグループの募集促進を自らの主要活動とした⁽⁵⁾。

このモレイの記述だけでは、同グループの重要性が必ずしも伝わらない。『クズバス』に載った2つの現地報告を紹介しておこう⁽⁶⁾。1922年10月29日（日曜日）にロサンジェルスでクズバス事業に関心のある人が集まり、約20人がグループに参加した。議長、書記兼出納方、記録書記が選出され、少なくとも月1回の会議開催が決められた。出席者のうち9人が翌年最初の〔派遣〕代表団で発つ意向が示された。

シカゴでは1922年11月26日（日曜日）にグループ会議が開催され、議長と書記が選出された。その後、臨席したキャルヴァートの講演があり、クズバスの現状（直面する苦難も含め）が語られ、来春に必要とされる労働者のタイプが指摘された。続いて、現地便り3通（2通はフィンランド人、1通はブルガリア人）が読み上げられた。フィンランド同志の報告では、フィンランド人クズバス・セクションが形成されつつあり、シカゴ・グループに加盟の予定とのことであった。同グループは毎月第1と第3日曜日に会議を開き、60人を超える規模で、その中に非常に有能な数人の技師がいた。なお、『クズバス』1923年8月30日号に「一行は9月5日に発つ」との小記事が載り、それは同日に出航する第11陣の予告だったのだが、それにシカゴ・グループから書記だったコーザー（A.A. Cother）ら13人が加わっていた。彼らは「昨年 H.S.キャルヴァートによって組織された」と記事にわざわざ書かれていた⁽⁷⁾。

両グループとも上記モレイによる「1ないし2個人が地元代表」の表現から連想する以上の規模が想定される。既述したように（第2篇, 13）AOC議長キャルヴァートが全国を遊説し続けていたことはリュトヘルスからも評価されていなかったのだが、キャルヴァートを中心に築き上げられたクズバス・グループという全国規模のネットワークこそが入植者募集・派遣運動を下支えしていたのである。そのネットワークがフルに機能できたのは、バーカーが編集・発行していた『クズバス』が募集はもとより衣類、書籍、そしてクリスマス贈り物の提供までも絶えず呼びかけ、いわば「掲示板」の役割を果たしていたからである。その『クズバス』が1923年12月1日号をもって停刊することになった。最終号にも、「クズバスについての情報は以下から得られる」と26都市の各グループが案内されていたにもかかわらず⁽⁸⁾、同機関誌なきあとのネットワークに対して困難は避けられなかったであろう（ただし、1923年初めに募集キャンペーンやり方に明確な変化、いわば「下」からではなく、「上」からのより限定的な募集への切り替わりが起こりはじめて以来〔後述〕、クズバス・グループのネットワークの必要度は下がり、機能低下に向かいつつあったけれども）。

(5) J.P. Morray, *Project Kuzbas. American Workers in Siberia (1921-1926)* (New York, 1983), 145.

(6) “Los Angeles Group,” *Kuzbas*, Vol. 1, No. 7, 20.XI.1922, 7; “Chicago Group at Work” & “Chicago Kuzbas Group,” *ibid.*, No. 8, 20.XII.1922, 8.

(7) *Kuzbas*, Vol. 2, No. 3, 30.VIII.1923, 15.

(8) *Kuzbas*, Vol. 2, No. 6, 1.XII.1923, 14.

リースが責任者となつてすぐに遭遇したのが、アメリカにおける反「クズバス」キャンペーンとしては最大の前 AOC 委員への告訴事件だった⁽⁹⁾。本篇では後述する理由で本件を正面から取り扱わないが、おおよその経緯だけを略記しておく。

1923 年 4 月 6 日、1 つは（早々と離脱して帰国してきた元入植者たち）ドイル (Th.B. Doyle) とノヴァク (A. Novak)、もう 1 つはレイ (O. Rae) それぞれによって前 AOC 委員が告発され、リースとコスグローヴが逮捕された。その告訴状の予審を経て、4 月 15 日に前 AOC の 6 委員、つまり、キャルヴァート、コスグローヴ、ボールドウィン (R.N. Baldwin)、リース、バーカー、ムラリが（入植者が自己負担した資金の）窃盗罪で大陪審に起訴された。5 カ月後の 9 月 27 日、裁判官によってコスグローヴを除く 5 名の（重・軽）窃盗罪のすべての告訴が棄却され、コスグローヴについては 5 つの告訴のうち 3 つが棄却された。無罪の決め手となったのは、告発人が自己資金が盗られたと訴えた当該日時にリースら被告人がニューヨークにいなかったことが判明したからである。コスグローヴへの残り 2 件の訴訟も、時間だけが引き延ばされたが 1924 年 1 月 16 日に打ち切りとなる⁽¹⁰⁾。

本件を本篇で取り扱わない理由は、以下である。

①結局のところ、告発者自身が（レーニンが原案を作成し、幾多の苦難に耐える能力と覚悟が不可欠な入植であることが明記された）契約兼誓約書（cf. 第 1 篇, 19; 第 2 篇, 12）に出発前に署名して、あくまでも個人の資格で外国に行ったことが、被告を不起訴とし、AOC による事業を追いつめることも不可能にした。

②再編されたニューヨーク事務局にとっては、確かに保釈中で裁判待ちの 6 名の前委員を抱えた募集活動および物資購入に「いくらかの遅れ」が生じた⁽¹¹⁾。けれども、「新契約」により入植者受入れ数は当初の 5,800 人から（1924 年 6 月 1 日までに）1,000 人（既入植者を含む）に制限され（第 3 篇, 29）、その上受入れ資格もより厳密化された募集人員に関する現地ケメロヴォからの指示により派遣が徹底されることになって⁽¹²⁾、当該業務に支障をきたすことはなかった。

(9) Cf. Morray, *Project Kuzbas*, 139-142; Л.Ю. Галкина, *Автономная индустриальная колония «Кузбасс»* (Кемерово, n.d. [2011]), 74, 83.

(10) “Arrest of the Former Kuzbas Committee,” *Kuzbas*, Vol. 1, No. 12, 7.V.1923, 8; “Dismissal of the Doyle Charges,” *ibid.*, Vol. 2, No. 4, 1.X.1923, 8; “The Report of Arthur Garfield Hays on the Larceny Charged against the Kuzbas Committee,” *ibid.*, No. 5, 1.XI.1923, 8; Галкина, *АИК-К*, 203.

(11) S.J. Rutgers, “Report on Kemerovo Industries A.I.C. Kuzbas. Oct. 1, 1922 to July 31, 1923,” *Kuzbas*, Vol. 2, No. 4, 1.X.1923, 6.

(12) 『クズバス』1923 年 2 月 20 日号に「新契約」にもとづき大幅に削減された人員募集が載り、雇用契約期間は 2 年から 3 年へと延び、「自らが申請している地位を占めるのに十分資格があることが確かである」人だけが求められる、と明記された上で必要な職種で計 92 人が募集された。“New Forces Needed for Kuzbas,” *Kuzbas*, Vol. 1, No. 10, 20.II. 1923, 10; cf. Morray, *Project Kuzbas*, 145-146; 第 2 篇, 32-33.

再編後の 1923 年入植者第 1 陣の出航は 5 月 1 日だったが⁽¹³⁾、その際ソヴェトの紋章付きの巨大な赤旗が振られていた。「反クズバス・キャンペーンは、АИК-К アメリカ事務局の作業を紛糾させようとしたけれども、入植者募集を中止させなかった」⁽¹⁴⁾。1923 年中の派遣は 5 月初めから 10 月半ばまで 7 回にわたって計 134 人が出航し、123 人が現地に到着した（それは 1922 年の人数の 3 割弱だった）（第 2 篇, 32）。

前 AOC 委員で起訴を免れたバーカーは、起訴された同志を援護する効果的な行動を取った。つまり、ドイルらによる告発に際して、クズバスへの派遣技師・労働者募集のための（申し込みアンケートを兼ねた）「趣意書」（第 2 篇, 12）に意図的な虚偽の記述があり、それが派遣される入植者に予め誤った楽観を許してしまったとの批判が起こった。「趣意書」をキャルヴァートとともに執筆したバーカーは、果たしてそれは批判どおりだったのかを専門家に聴くため現地の技師長ピアソン（A. Pearson, Jr.）に点検してもらうことにした。以下がその回答で、バーカーらは自信を取り戻した。「私〔ピアソン〕は注意深く『趣意書』を通読した。……事実の誇張または故意の虚偽として特徴づけられうるいかなる表明も私は見出すことができない」⁽¹⁵⁾。

ここで本件に対して、ソヴェト・ロシア技術援助協会のニューヨーク代表で、そして合州国で生じる諸問題に関してソヴェト政府の法律顧問であったレヒト（Ch. Recht）が取った行動を付記しておきたい。つまり、上記リースとコスグローヴの逮捕に際して、レヒトは自らの AOC との関係を否定し、クズバス・コロニーは実際にはソヴェト政府に信用されていないとまで表明した⁽¹⁶⁾。既述のように（第 2 篇, 23-24, 28）、技術援助協会と AOC との関係修復の余地は依然なかったろう。

(13) *Kuzbas*, Vol. 1, No. 12, 7.V.1923, 3. ガルキナの書の 37 頁では 5 月 1 日とあるが、なぜか 76 頁では 5 月 3 日となっている。Галкина, *АИК-К*, 37, 76.

(14) Галкина, *АИК-К*, 78.

(15) “An Opinion on the Kuzbas Prospectus,” *Kuzbas*, Vol. 2, No. 3, 30.VIII.1923, 8.

(16) Morray, *Project Kuzbas*, 144.

第2章 リースへのリュトヘルスとバーカーによる批判

リースには代表着任早々リュトヘルスとの間で書簡のやり取りがあった。残念ながら、未見のものもあり、具体的な内容がつかめない箇所もあるけれども、以下それらを可能な限り紹介していく。

リースのリュトヘルス宛 1923 年 5 月 29 日付書簡⁽¹⁾は、ユリウス〔・ハイマン〕(J. Heiman) を介して 5 月 28 日に受け取ったリュトヘルスのリース宛 4 月 22 日付書簡〔未見〕への返信であった。特に前半部はとりとめもない内容であり、逐一の紹介は省き、最初に指摘したいのは、次のように AOC 批判が展開されていたことである。「具体的に作業を始めるためのいかなる責任ある人物もアメリカにはいなかった」。「そこには執行部の仕事のための容量も、……煽動的な演説以外のいかなる能力も絶対的にない」。リース自身が AOC の一員であったことを考えれば、他人事すぎる感もなくはないが、元々 AOC の組織は「正式な事務管理者なしに運営されてきて、各人が……自らの仕事に……〔精励し〕、そのことは他者の分担への共同ないし精励に常に欠けていた」(第 2 篇, 25)。それゆえに、前者の引用文は「〔そのことを〕認めて、私〔リース〕は組織とともにとどまり、必然的に伴うであろう全責任を引き受ける決心をした」とあるが、「AOC は廃止されてしまった」中で、リースに何ができたであろうか？ 彼が責任を持って行ったのは、キャルヴァートが議長だった時に率先して附設しようとした(第 2 篇, 19) 諮問委員会 (Advisory Committee) の (附設ではなく) 設置であり、以下の委員が列記されていた。スタインメッツ博士 (Ch.P. Steinmetz; ゼネラル・エレクトリック社)⁽²⁾；ポラコフ (W.H. Polakov; エコノミスト兼顧問技師)；アーンスト (M.L. Ernst; ニューヨーク州弁護士)；ボールドウィン (アメリカ市民自由連合会長)；ピーターソン (L. Peterson; ニューヨーク合同銀行支配人)；モラー (J.H. Maurer; ペンシルヴェニア労働同盟会長)⁽³⁾。

スタインメッツ、ポラコフ、ボールドウィンはすでにキャルヴァートの候補者リスト(第

(1) РГАСПИ, 515/1/4299/191-192. 宛名リュトヘルスの右余白に以下が手書きされている。

“for W H[aywood]/S B[erg]/J M[asukevich] only”

(2) スタインメッツは帰国するロシア人を介してレーニンに 1922 年 2 月 16 日付書簡を届け、その中でロシアの社会・産業再建の成功を願い、その再建に技術（特に電気技術）問題でいかなる方法でも援助できる自らの意志を伝えた。遅ればせながら書簡の主が世界的に著名な電気技術者で、社会・政治的見地からソヴェト・ロシアに共感を抱いていることを知ったレーニンは、その申し出の実現は国交のない両国間では困難だが、この往復書簡を公表し、申し出が実現する機運が熟すのを待ち望む、と 4 月 10 (12) 日に返答した。“Lenin and Steinmetz,” *Kuzbas*, Vol. 1, No. 2, 20.VI.1922, 9; 『レーニン全集』第 35 巻(大月書店, 1960), 610-611.

(3) Cf. “Kuzbas Advisory Committee in America,” *Kuzbas*, Vol. 2, No. 2, 29.VII.1923, 5.

2 篇, 19) に挙がっていたが⁽⁴⁾, 残り 3 名はリースによる人選と推測され, その中のアー
ンストは, リースに「アメリカの組織を法人化することを助言した。……彼はしきりにこ
の方向を助言したが, しかし 5 月 28 日の昨晚まで私〔リース〕は説得されず, 明確な行
動を取る前に徹底して本件を調査するつもりだ。法人化するためには〔登記上〕3 人が求
められるだろう。私は他の 2 人を誰にすべきか全く決定できていない」。

本件がリュトヘルスの強い反対を招くことになるのだが, そのリュトヘルスの返信を紹
介する前にリースによる他の人物評を見ておく。「私〔リース〕はボールドウィンが再編
期に大いに奉仕してくれたことを見出した。……ユリウス〔・ハイマン〕もまたあらゆる
可能なやり方で協力し, 私に大いに (very, very) 良く奉仕している」。「存在しない委員
会議長の必要性は実際はない。もちろん会計係は貴重で, ムラリはこの点ですばらしく行
動している。コスグローヴは現在炭坑夫募集で旅に出ているが, しかし彼は大いに成功し
てはいない」。

そのムラリへの高い評価とは対照的な評価が, 同一の書簡中に次のように記されている。
「あなた〔リュトヘルス〕が最近〔入植者のうち最も多い〕フィンランド人はもはや望ま
しくないと断ったので, たぶん我々の購入が完全に終わるやいなや, ムラリがする実際の
仕事はほんとうにないので, 彼が我々との関係を断つことが必要になるであろう」(引用
文中のリュトヘルスの「言」については, 後述するようにその真意をリースが汲み取った
上での記述かは疑わしい)。それら正反対の評価をどのように解するべきか? 現下の会
計係としてムラリをリースは評価するも, その仕事は早晚終わるものと速断し, 早々と「断
つ」ことを主張したように見える。その推測を裏付ける理由に, リースは続く文章で「フ
ィンランド人にとって彼〔ムラリ〕の威信が, 事務所スタッフの一員としてつなぎ留めて
おかれる決定的な要因であるので」とまでも記していることが挙げられる。英語を良く話
せないムラリを同国人募集の役割に限定して加入させた経緯 (第 2 篇, 10-11) を, リース
は快く思っていなかったようだ。

結局のところ, 前 AOC 委員で改めて雇用されたムラリおよびコスグローヴへのリース
の評価は良いとは言えず, もう一人の『クズバス』編集を継続したバーカーへの言及は書
簡にはないものの, 両者は最も敵対し合う関係にあった (後述)。

リュトヘルスはリースからの「〔1923 年〕5 月 29 日, 6 月 4 日, そして 6 月 20 日付書
簡をほとんど同時に受け取り」, 7 月 23 日に返信した⁽⁵⁾。その中には婉曲な表現で内容が
つかみがたい箇所もあるが, 以下抄訳する。

…… 5 月 29 日の書簡は当然コスグローヴとムラリの双方の側からかなりの憤りを

(4) スタインメッツは, ボールドウィンからの 1923 年 4 月 26 日付依頼書に対して, 委員
長就任は仕事の関係で無理だが, 時間の許す限り喜んで協力・助力すると返事した。が,
「クズバスへ行くことができればいいのになあ」と語っていた彼は, 半年後の 10 月 26
日に亡くなる。Kuzbas, Vol. 2, No. 1, 20.VI.1923, 7; No. 5, 1.XI.1923, 6.

(5) РГАСПИ, 515/1/4299/129-130. 6 月 4 日および 6 月 20 日付書簡は引用者未見。

引き起こし、1 コピーがケメロヴォの同志たちに送られたので〔本章注 1 参照〕、不安と不信の感情を起こさせるのを助長した。それは我々の間での一種の共謀として組み立てられさえしてしまった。

個人的には私〔リュトヘルス〕はまた、あなた〔リース〕が追求している政策は全く正しくないと確信している。あなたの処置は、「クズバス」を明確なプロレタリア組織としてよりも、むしろビジネス企業として現れるようにする試みや願望と関連して大いに考えられるようになっている、と私は理解する。／このことにかんがみて、ニューヨークのクズバスを 3 人 の名前で法人化させようとするあなたの傾向性は、明らかにしつこくせがむ疑いの余地がない典型にちがいないであろう。この政策に私は断固として反対しなければならない。万一この地の正規の経営委員会と諸機関がそのような段階を必要とみなさない限り、いかなる法人化もない。

6 月 4 日の書簡〔引用者未見〕であなたは、あなたの個人的な〔アメリカ共産党の合法組織であるアメリカ労働党への〕加入について書いている〔この問題はあとで取り上げる〕。そのような加入が定着すべきであることは、我々の間では明らかに了解ごとであった。私見では、このことはあなたの仕事においてあなたを妨げない保障を与えるために取り決められたであろうに。……

このことが第一に、アメリカにおいてその点で役割を果たすことに実際合意が得られ、かつ我々を支援する諸機関との我々の関係を知っている人〔共産党員であるコスグローヴを指す〕とのあなたの争いに私を巻き込んでいる。／あなたはその人物を購入代理人ないしビジネス・マネージャーとして行動するとみなしながら、彼がそれなりに役割を果たす経験や能力に欠けていることはあなたが正しいのかもしれない。しかし、彼が非常に明確で重要な他の役割を果たしていることを、あなたは知っており、それがもしも無視されるならば、プロレタリア組織としてのクズバスを滅ぼすことになる。あなたは知っているように、私はこの同志に全幅の信頼を表明してきており、私が見ることができる限り、この地の同志すべてが同じ意見だ。何ものも私の意見を変えさせないし、私はあなたの態度が良く根拠づけられていないと考える。あなたの 5 月 29 日付書簡の後半部で、あなたはまたあなたの意見として、同じ性格のもう一人のメンバー〔ムラリを指す〕がクズバスとの関係を断つべきだと言及する。……その上、この共同と管理は、我々のような組織において重要な要素であり、完全な不信や不調和を容易に引き起こすかもしれない財政部分に直接また及ぶ。

あなたが後半の件で与えた論拠はいくぶん論理的に思えるが、しかしそれはフィンランド人の募集を停止することを意図しても、示唆してもいないという事実を別にして、もしも適切な諸機関によって必要な交代要員が手配・供給されないならば、新しい明確な指示が与えられるまで一時的な措置として、明確で建設的な考えを代表するそれら 2 人の損失が望ましくないであろうことは明らかだ。

あなたは経費をまさにその限度まで削減するための明確な指示を受けることに反対かもしれない。しかし、このことは別の話だ。もしもその 2 人が実際の仕事のために必要とされないならば、彼らは当然雇用されるべきではないし、その雇用を彼ら自身が確かに欲しないだろう。私が言及している役割は空いた時間になさるうし、両同志は長い期間クズバスのために働き、同時に他の方法で生計を立ててきている。これ

らの問題は注意深く切り離されるべきだ。

その上、限られた費用に関する限り、これまでのところ何も成し遂げられておらず、4月の1,740ドルの組織経費と（……）続く数カ月における最もありそうなより多く〔の経費〕が、私見ではあまりに高すぎる。

クズバスのニューヨーク事務所を「ソヴェト・ロシアの友」のような他の組織と合併させる提案が行われてきており、それはその方向での唯一の論理的解決だと私は感じる。もしも適切な組織体が未だ利用できないならば、そのような可能性を準備することが我々の責務であるべきだろう。クズバスの利益を代表するのは、3人の管理委員会（つまり合併の場合）で十分であるべきだが、しかしそれら3委員のうち2人は上述の人たちのようなタイプで少なくともなければならない。／我々はこの時期を、実際の可能性を見出し、その道を準備するために利用すべきであるけれども、問題を引きずった間、大きな変更を加えないことが賢明かもしれない。このことはあなたによって提案されたような変更（それは我々の大多数ばかりか私にとっても受け入れられない）に対して等しく良く当てはまる。

「リベラル」の諮問組織体の形成が、以前に提案されて、その時私がそれに強く反対したので却下された。私はなお同じ意見だが、しかしスタインメッツ教授やロジャー・ボールドウィンのような人が一員で〔あるならば〕、我々は少なくとも一時的に耐えるためにこの創設を当然支持しなければならず、我々がそのようば共鳴者の支持をいかなる形であれ保つことができるならば、喜ばしいにちがいない。しかしながら、メンバーは絶対に最小限に限られるべきだ。その上、私はこれを一時的な手段と考え、私はリスト中の名前のいく人かを知らないので判断を延期する。

本状はあなたと他の2同志の熟慮のためのものである。私によって指摘されたような方向での可能性についてあなた方すべてからの意見を望みたい。その間、共同と管理のための十分な機会が上述の同志のために維持され、ニューヨーク議長〔代表〕と相談なしにいかなる重要な処置も取られず、そして会計係の副署なしにいかなる支払いもなされないことを私は期待する。

続けてリュトヘルスは、「追加の情報が届いたので」1923年8月15日に（3番目の経営委員会委員コトリアレンコ〔Д.М. Котляренко〕も連署した）書簡をリースに（コスグローヴとムラリも宛名に加えて）出した⁽⁶⁾。

私〔リュトヘルス〕が7月23日付書簡を書いたあと、追加の情報が届き、私の以前の書簡で必要とみなされた制約なしにあなた方に書く機会が到来している。

ニューヨークも状況は第一に、意に満たなくなっている。なぜならばリースが管理のために満足のいく保障を与えることができるそのグループに加入しなかったからである。このことはリースがここにいる時は理解されたが、そのようにしないために与えられた理由は私を納得させない。と言うのは、必要とされているのは形式

(6) РГАСПИ, 515/1/4299/131.

的なものではなく、管理だからだ。これは個人的な不信の問題ではなく、システムであり、良き実践である。……このことを理解できないことが、大西洋を隔ててあなた方側とこちら側とに不信と半信半疑の雰囲気をかもしだしている。

この状況を治すために、以下の指令が同志コトリャレンコと私自身の署名の上で与えられる：

1) ニューヨークでの購入とグループの派遣を含む仕事に個人的に責任が相変わらずあるリースは、自らの行動について十分な情報をコスグローヴとムラリに与え、また自らの計画（企図された主な購入を含む）について両者（彼らは宣伝の方法がアメリカ人グループ〔アメリカ労働党〕によって管理されることを考慮して、グループと接触し続けるであろう）と相談するものとする。リースと上記同志との間の争いの場合、その問題はロシアの経営委員会委員に問い合わせられ、決定されるものとする。クズバスの経営委員会の決定自体に関する監督権は CTO およびソヴェト・ロシアの適切な諸機関によって行使され、アメリカ人グループの管理には従わない。

2) すべての財政問題では、支払いがなされる前に同志ムラリが相談され、副署しなければならない。彼とリースの間に意見が異なる場合は、コスグローヴに問い合わせられ、コスグローヴを通じてグループに、そして最終的にはロシアの経営委員会に〔問い合わせられるものとする〕。

3) フィンランド人同志を派遣する問題では、……ロシアの経営委員会からの通知〔がある〕まで、指令は変えられないままである。……人々を派遣する時、リストどおりに資格の厳密な遵守が要求される。……大工と建設労働者はより多く求められず、それゆえ受け入れられない；炭坑夫と特定の専門技術者は緊急に必要だ。

4) ソヴェト・ロシアの経済的支援のために、他の諸組織との密接な共同や可能な合併に取り組む努力が払われなければならない。……

以上 2 通でのリュトヘルスによるリース批判の要点を 2, 3 取り上げておくともまず、リュトヘルスは書き出しで、リースがニューヨーク事務局を代表して「追求している政策は全く正しくないと確信している」と言い切っていることである。批判された政策で特に問題なのは法人化案であり、それは АИК-К を「明確なプロレタリア組織としてよりも、むしろビジネス企業として現れるように」しかねないとみなされた。その法人化案は諮問委員会の一員となった「リベラル」な弁護士からの助言に元々よるものであり、その助言をリースが受け入れ、それを諮問委員会に提案しようとしていたこと、またリースによって再提案された諮問委員会設置自体もリュトヘルスによって原則として反対されていたことを勘案すれば、リースの考えが АИК-К 創設の理念および原則から逸脱しすぎていたことは明らかだ。

もう 1 つの問題は、リースが「そのグループ」に加入しなかったことである。「そのグループ」とは何を指すのか？ 「グループ」とある限り、AOC の活動を全国的規模で下支えしていた上記「クズバス・グループ」が該当しそうだ。確かにリースは帰国後意図して同グループに関わろうとした形跡はないけれども、そもそも組織の代表が下部グループに「加入する」手続きが必要とは考えがたい。私が得た唯一の手がかりは、1923 年 7 月 4 日にニューヨークからビル〔・ヘイウッド〕に宛てた（前 AOC 委員たちの仕事に協力し

ていた署名が判読困難な)人物の書簡中の以下の記述である。「T.R. [リース] は最後まで [代表として] とことんやる本気で、当地到着時に W.P. [アメリカ労働党; cf. 第 2 篇, 10] に加入することになっていた」。彼の本気度はすぐに後退したが、しかし党の方も彼の入党反対を画策したとのうわさが記されている⁽⁷⁾。つまり、「グループ」とはアメリカ共産党の合法組織である労働党を指し、モスクワの新経営委員会での合意事項であった入党、しかも「管理のために満足のいく保障を与えることができる」入党をリースが果たさなかったことは、彼がリュトヘルスによって「管理者」として不適格とみなされたことを意味する (その不適格については、続いて取り上げるバーカーによるリース批判の書簡がヨリ具体的に指摘している)。さらに言えば、文面にあるように、代表の入党は「プロレタリア組織としてのクズバスを滅ぼ」さないために求められていた (「おわりに」に続く)。

リースが具体的にどのような思考や行動で問題があったかについては、「直言居士」であった (第 3 篇, 25) トミー [・バーカー] が W.H. [ヘイウッド], ベルグ (S. Berg), そしてマスケヴィチ (J. Masukevich) 宛に出した 1923 年 8 月 15 日付書簡で窺い知ることができる⁽⁸⁾。ただし、リースに敵対する側の感情的でもある書簡ゆえに額面どおりには受け取られず、それへのリースの反論も見出せない中での紹介であることを断っておく。

「あなた方が皆なお関心があることを私が願っているところのこのクズバスの目的に関する 3 つの出来事を、あなた方に知らせるために一筆啓上」とある冒頭に続く文章の内容は多岐にわたり、かつ話が前後しており、関係者ごとに整理して引用することにする。

①リースについて。彼への批判が、本書簡の核心である。

「私 [バーカー] がほのめかしてきたように、リースとコスグローヴは激しく反目し合っている。……リースは無能であり、彼の弱点はもちろんご婦人方である。彼はサー・ギャラハッドのような騎士であり、女殺しである。事務所では彼はツァーリであり、……彼が諮問委員会を開いた時、コスグローヴ、ムラリ、そして私は (リースが設立することを命じられたその新委員会の委員であることになっていたけれども) 出席を招待されなかった。何が起きているか、我々はたまたま知ったにすぎない。……彼とコスグローヴの両名宛の書簡を、彼は時折コスグローヴが見ることを全く許さない。もちろんリュトヘルスやモスクワ事務所宛の彼の大部分の書簡は、我々に (偶然を除いて) 決して見せられていない」。

「推定では、彼 [リース] と SJR [リュトヘルス] とブロンカ (Bronka Kornblitt) がクズバスの成功を収めることができた唯一の人たちである。彼はここ [ニューヨーク] に来て以来、我々が持っているいかなる組織も破壊してきており、他のいかなるところでも同じことをするであろう。彼は独りよがりとうぬぼれ以外のすべてが欠けている」。

(7) РГАСПИ, 515/1/4299/197-199.

(8) РГАСПИ, 515/1/4299/204-206. 末尾に手書きで、「これは機密 [文書] である。読後は破棄せよ。受領を通知せよ」とあった。本状の送・受信者の顔ぶれを見ると、共通項がある。つまり、ベルグを除く 3 名は IWW メンバーであり、ベルグも含めて「新契約」を支持せず (cf. 第 3 篇, 24), リュトヘルス、リースら経営委員会の当時の方針に批判的であった 1 グループを成していた。

「あなた方は知っているように、彼〔リース〕はとうの昔にナジェジンスクのために発つべきであったが、しかし彼と SJR はその考えを葬った」。

「リースは今シカゴに行っている。名目上は Cal[vert] が昨年関心を持たせ、組織したシカゴ・グループと会見するためであるが、ほんとうはセントルイスの彼の家庭を訪れるためである」。

②スカイラーについて。彼は AOC 解散後、給与雇用もされていないけれども、彼へのバーカーの期待は依然大きい。

「我々は、スカイラーがケメロヴォに行くのをなお待たせており、彼は全く愛想が尽きていたけれども⁽⁹⁾、自らを鼓舞し続けてきている。……我々は信頼すべき方面から、3名の委員が翌年のためケメロヴォで選出されるであろうし、SJR が3名のうち1名にさえ入らないかもしれない、とのニュースを今得ている〔このあたりの情報源は怪しい〕。我々はスカイラーをその1名にすることを試みているし、もしもそれが失敗すれば、その時新〔経営〕委員会には彼をテクニカル・スタッフに招く選択肢があるだろう。どちらの地位もクズバスにとって良いであろう。コロニー計画のこの元々の部分を実行することは、リースの目的であろうし、PPC〔コスグローヴ〕の目的でもまたあるべきだ」。

③ムラリについて。彼へのリースの追い出し工作があった。

「ムラリはここの事務所の財務担当を辞任することを〔リースによって〕要求された」。

「リースはムラリを給与台帳〔雇用〕とまた基金管理から追い払おうとしたが、しかしムラリはその仕事について少しもかまわない——自らの商売で2倍稼ぐことができる〔ので〕——がしかし、彼は確かに基金のための彼の責任を引き渡すことを拒んだ」。

④コスグローヴについて。彼へのバーカーによる批判は、リース批判に次いで厳しい。

「コスグローヴはどっちつかずの態度を取ってきた——彼は彼の頭の中には1つのアイデアもないけれども、いつでも賢く見えるように行動する——彼はリースが去ったあと、この事務所を経営するという甘い実^{フラム}を得た。しかし、リースはとどまり続け、さらにコスグローヴを締め出そうと試みた。……最近の事務所の会議ではリースはコスグローヴを解雇するつもりだった。なぜならば、コスグローヴはコロニーのため3人の補充者を確保するために約800ドルを使い果たしたからである。彼は潔く責任を取る代わりに、道徳的見地からその費用のために数週間クズバスのために働くことを申し出た」。

「リクルーターとしてコスグローヴは、他のすべての事柄についてと同様に非常に見劣りがする」。

以上、バーカーによる辛口の人物評が目立つけれども、以下のように、それでも彼は前委員たちが AIK-K に何らかの貢献をなおするであろうと（リースに対しても）信じていたのであろう。「もしもあなた方〔ヘイウッド、ベルグ、そしてマスケヴィチ〕が新〔経営〕委員会か、クズバスと関係する活気あるいく人か、どちらかと接触できるならば、あなた方は委員会がコスグローヴ、リース、そして私〔バーカー〕自身を構成員としてクズバスに呼び戻すように提案すべきだ。ムラリも。……スカイラーもまた呼び戻されるべき

(9) とりわけ、彼の有用性が訪露中にリュトヘルスによって拒まれたからであろう（第3篇, 32）。

であり、その呼び戻しは適切な言葉で工夫されるべきである」。

続けてバーカーは、自らの今後に関して次のように付言していた。「事の成り行きでクズバスとの私の 2 年〔契約〕期間は 10 月末で終わり、そして私が次の 2 年間それにとどまることを決意する前に、何が起ころうとしているかを私はほんとうに知りたい」と。その彼の事業への契約更新および真相究明への意欲が、翌 1924 年 2 月末頃までにリースが「更迭」されたあとの管理者就任を彼に受けさせることになったのではないか。

1923 年 12 月 5 日にはトミー〔・バーカー〕はビル〔・ヘイウッド〕宛に書簡を書き、それは皮肉まじりの省略形の多い文章で、解読困難な箇所が多いけれども、リース批判の箇所を以下抜粋する⁽¹⁰⁾。

ここはおかしな世界だ、ビルよ。モント〔・スカイラー〕が言うように、今年 2 人の偉大な発見、つまりキング“Tut[ankhamen]”とキング“Rut[gers]”の発見があった。Rut は事態がいかに動いているかを見るために 11 月 7 日にケメロヴォに向かって発った。皇太子 T. R[eesse]. はなお〔前職地〕南イリノイに下っている。まる 3 カ月そこにいて、戻って来ようとしな。彼は経営委員会に乗り組んでいるのか？……／彼は給与をもらっており、ほとんどすることをせず、南イリノイから事態を管理していない。……

後半の文章と上記バーカーのヘイウッドら宛 1923 年 8 月 15 日付書簡中の記述とを突き合わせると、リースはイリノイ州南部（グラニットシティ）に隣接するセントルイスに 3 カ月以上滞在し続け、職務放棄かそれに近い状態であり、年明けての退職（あるいは更迭）につながったように見える。

リースらの退職等に関するガルキナの記述は、こうである。「1924 年 2 月末頃までにリースを含む全事務局員が退職を受け取った。ハイマンとムラリだけが残った。しかし、すでに春には АИК-К 代表機関にバーカーを復帰させた。彼とムラリに 6 月末に全業務と現金が引き渡され、さらにはアムトルグ（Amtorg; Амторг）貿易会社社長^マグルギンと密に接触して運営がなされていく」⁽¹¹⁾。モレイも、「リースが 1924 年に立ち去り、バーカーによって取って代えられた」としか書いていない⁽¹²⁾。

これらの記述は、あまりに曖昧すぎる。なぜ「退職」したかの理由が挙げられておらず、それどころか両者とも、本篇で紹介しているリースとバーカーとの陰悪な関係について全く触れていない。

(10) РГАСПИ, 515/1/4299/224.

(11) Галкина, АИК-К, 80.

(12) Morray, *Project Kuzbas*, 147. なお、1924 年 3 月 2 日にケメロヴォの化学工場^{プラント}が操業開始を迎えることになるのだが（次篇）、その際「ニューヨークから〔代表となった〕バーカーの、ロンドンからトム・マンの各祝辞」が寄せられていた。Г. Тринчер/К. Тринчер, *Рутгерс*, 143; G.C. Trinchler Rutgers/K. Trinchler, *Rutgers. Zijn leven en streven in Holland, Indonesië, Amerika en Rusland* (Moskou, 1974), 152 [蘭語版では「キャルヴァートとバーカーの」となっているが、前者は誤記であろう]; cf. Morray, *Project Kuzbas*, 156.

さらに問題なのは、ガルキナのアムトルグ貿易会社との関係についての記述である。同社は、1924 年 5 月末にニューヨークで合併設立されたばかりの合州国における最初のソヴェト連邦の貿易代表部であり、ガルキナは「社長グルギン (Гургин)」と記しているが、フルギン (I. Khurgin; И.Я. Хургин) の誤りであろうし、彼は設立者であるが、社長は別にいて取締役会議長を務めていた。その彼は同年 8 月 27 日に不慮の死を遂げており⁽¹³⁾、同社と果たして何時からどのように「密に接触して」いたのか、後述のようにニューヨーク事務局解散後の業務を同社が引き継ぐことになるだけに、解明が俟たれる。

また、ガルキナはバーカーおよびリースについて以下のように当時の活動をそれぞれ記しているが、しかしより具体的な実態は明らかにされていない。再編後、当地の仕事で最も貢献したのは、バーカーであった。彼が従事したのは、入植者募集・派遣、買い付け、通信、『クズバス』編集・公刊であった。リースについては、多くの時間、入植者募集旅行に同行した〔上記バーカーによる批判があるように、同行の実態は確認の必要がある〕。リースへの多くの協力を、詳細な事務報告書⁽¹⁴⁾を残しておいたメリー・キャルヴァートおよび熟練女性秘書エルサ・アンターマン (Elsa Unterman) が与えた。しかし、彼は諸事情に精通することはなかった、と⁽¹⁵⁾。当初リースに協力的であったメリーですら、早々と 1923 年 5 月 31 日段階で次のようにヘイウッドに知らせていた。「リースがここで唯一管理している、あるいは彼がそう思っていること以外のいかなるゴシップについても私〔メリー〕は考えることができない」⁽¹⁶⁾。速記兼事務管理者だったエルサについても、バーカーは上記ヘイウッドら 3 名宛書簡の中で次のように書き留めている。「彼女はリースに我慢できない、そしてあなた方は『なぜか』の見当をつけられる」⁽¹⁷⁾。

なお、バーカーが関係者宛の書簡でしきりとリースらを批判している最中、彼が編集を一手に引き受けていた『クズバス』の最終号が 1923 年 12 月 1 日に発行された。その際、停刊の理由として以下の 2 点が挙げられた。①割当金の制限；②アメリカでのクズバス作業の縮小⁽¹⁸⁾。ガルキナはその理由として、「コロニー幹部要員形成の終了のためプロジェクトの広汎な普及手段としてのその緊急性の喪失」を挙げており⁽¹⁹⁾、いずれも似通った理由だが、なぜその時期だったのか？ 別の理由もあったかどうかは目下つかめない。

(13) R.B. Spence, *Wall Street and the Russian Revolution 1905-1925* (Waterville, OR, 2017), 237, 242, 247.

(14) 1923 年 1 月に新任のリースのために編集された「АОС ニューヨーク事務所の通常業務に関する報告書」。РГАСПИ, 515/1/4306/209-238; cf. 第 2 篇, 2-3, 25.

(15) Галкина, *АИК-К*, 70.

(16) РГАСПИ, 515/1/4299/437.

(17) РГАСПИ, 515/1/4299/205.

(18) "Our Last Number," *Kuzbas*, Vol. 2, No. 6, 1.XII.1923, 6.

(19) Галкина, *АИК-К*, 80.

第3章 バーカーの復帰から事務局の解散へ

リースがバーカーに取って代えられたことに関して、リュトヘルスは「クズバス年譜」で一切触れていない。リースに管理責任者としての適性が欠けていたことについての反省が、リュトヘルスになかったとは言えないだろう。リュトヘルスがバーカーを後任に据えるしかなかったのも、バーカーとの間に考えの違いがあるものの彼の管理能力および彼によるリース批判を認めたからであつたろう。

「ニューヨークの事務局指導者」⁽¹⁾となったバーカーへのリュトヘルスの書簡で最初に「クズバス年譜」に記録されているのは、1年半もあとの1925年8月26日、28日、および29日付の3通である⁽²⁾。最初のは、自らの病状悪化（糖尿病と座骨神経痛）によるオランダでの治療の必要から助言的な3人委員会が設置されたことなど現地の情報提供であつた（後続篇）。後二者は、アメリカからの新しい働き手の受入れに関する話だが、具体的な記述はない。関連して29日付書簡で、「また技師スカイラーの、アメリカで1〔ソヴェト・ロシア〕技術援助協会（Rapec；未詳）を組織したいという提案が取り扱われる。ソヴェト連邦への関心がアメリカで再び公然と高まっている」とあり、スカイラーが依然ニューヨーク事務局に関わっていたことがわかる。

その中にはまた、契約期間終了後アメリカに帰国したピアソンおよびシップマン（S.S. Shipman）がそれぞれ専門誌のために執筆中の論文（前者のが計画されたシベリア鉄鋼産業、後者のがクズバス諸企業の労働問題について）の紹介がある。実は後述するように、シップマンは1927年初めのニューヨーク事務局解散時の最後の管理者となるので、彼の論文および経歴について少しく紹介しておく。

シップマンが『産業管理』1925年10月号に載せたのは「シベリア工場における労働問題」であり、その中で、経験を積んだロシア人機械工および炭坑夫は、技術においてアメリカ人同僚より劣っていなかったけれども、前者の近代機械類への未経験は機械生産方式を導入する点で深刻なハンディキャップであると説いた⁽³⁾。彼は1918年コーネル大学卒業の土木技師で、冶金学も学び、1922年から約2年間ケメロヴォで石炭業および化学プラントに従事した。ドイルらによる告訴問題の最中、彼はピアソン、ケネル夫妻（Ruth & Frank Kennell）ら11名とともに連名で「アメリカ人公衆」に向けて「最近2、3カ月間、

(1) 「代表」でも「責任者」でもなく、「指導者」との表記には、任命に際してリュトヘルスにいささかわだかまりがあつたのかもしれない。のちの書簡（後述）では「ニューヨークの我々の代表」と記される。

(2) ПГАСПИ, 626/1/6/37.

(3) S.S. Shipman, "Labor Problems in a Siberian Plant," reprinted from *Industrial Management* (New York), issue of October 1925, 2-7 in: ПГАСПИ, 515/1/4307/1-5 о6.; 515/1/4303/26-29 о6.

多くの偽りの表明がアメリカ報道機関で公にされているが、それらを正すために「詳細な 1922 年 6 月 10 日付」現状報告」を作成し、それは『クズバス』8 月 10 日号に掲載された⁽⁴⁾。

1926 年に入って 3 月 15 日にリュトヘルスは「ニューヨークの我々の代表」バーカー宛にテリベス (Тельбес(с); АИК-К が清算される前に吸収合併に向けてプロジェクト化をめざした最後の鉄鉱石資源開発地域) についてまた書いている⁽⁵⁾。その内容は、以下のようになり具体的に書かれている。アメリカの建設会社との契約を準備することが重要であろう。当該会社に継続的な融資を引き受けてもらい、数年間の返済の一部を事業収入からにしてもらうべきであろう。このことが、我々は自己資本を必要な時に自由に使えないので、多大な損失回避となるであろう。私〔リュトヘルス〕は〔ニューヨーク事務局が推す〕“American Foundation Company”を技術的に十分でないとみなし、それに反してシカゴの“Freyn, Brassert and Comp.”に注意を向けている。後者がオランダに溶鉱炉企業を申し分なくプラント輸出していたことを確認できる機会を私は得たので。「バーカーはこれや他の会社について情報収集すべきだ。彼自身が協議のためにモスクワとケメロヴォに来て、彼の代理人として技師シップマンを任命すべきだ」。

リュトヘルスらの計画は、バーカーの以下の回想文が示すように、すぐあとに進められていった。「私はノヴォクズネツクの大製鋼所建設のための諸計画を私の書類入れに入れて運んだ；立案者はシカゴの^{プラント}フライン工学技術会社 (Freyn Engineering Company) であった。この会社はのちに工場の最初の 2 区画の責任を負った」⁽⁶⁾。また末尾の文章で、バーカーの訪露およびシップマンの代理人任命がリュトヘルスによる指示だったことがわかる。

1926 年 4 月 16 日にリュトヘルスの以下のようなバーカー宛書簡が続いている。アメリカで資金を得られないかどうかを、やはりバーカーは試みってみるべきだ。今石炭について限りがない照会があり、我々〔リュトヘルスら〕は事業を非常に速く、効率よく拡張できるであろう。テリベスについて私は次のように書く：我々に〔移管関係の〕証券が譲渡されるであろうことは問題にならない；しかし我々はテリベスのためにシベリア委員会に、同様にまたレニングラートの〔冶金工場新設〕中央委員会に参加するだろう。そこではソヴェト連邦全体の冶金工場の建設とプロジェクト化（テリベスについてはアメリカからの専門技師の受入れ承認も含む）が討議される。バーカーは自らの訪問に際して諸提案を携えて来るべきだ⁽⁷⁾。

(4) “To the American Public,” *Kuzbas*, Vol. 2, No. 3, 30.VIII.1922, 1-6. Also printed in: “Kuzbas Tells Its Own Story,” *The Nation* (New York), Vol. 117, No. 3031, 8.III.1923, 145-147.

(5) РГАСПИ, 626/1/6/47. 「また」ということは、以前の書簡があるということで、「クズバス年譜」1925 年 12 月あたりに、ニューヨーク事務局から冶金工場建設の請負業者の候補として後述する会社が提案されたとある。РГАСПИ, 626/1/6/41.

(6) T. Barker, “Lenin Inspired Us—A Veteran’s Reminiscences,” *Labour Monthly*, Vol. 52, No. 4, IV.1970, 163.

(7) РГАСПИ, 626/1/6/48.

かつて AOC は、スカイラーによって作成された最初の 1922 年 6 月 12 日付活動報告書に記されているように⁽⁸⁾、入植者募集・派遣事業（Recruiting）の「拡張」として工学技術（Engineering）、つまり現地から離れているために技術計画の輪郭を描くにとどまるけれども、クズバス企業への技術的支援をもう 1 つの活動項目に掲げ、実際その最初の計画資料を同年 4 月 18 日にリュトヘルスらへ送っていた。そのような「工学技術」に関する「諸提案」にバーカーが応えようとするのは、場違いなことではなかった。

にもかかわらず、8 月時点のリュトヘルスの記述に、その「諸提案」について「しかしながら依然として強いサンディカリズム的傾向を漏らしている」とある⁽⁹⁾。8 月 9 日にモスクワにいたバーカーの方も、同日リュトヘルスに書簡を書き、「クズバス年譜」の記述にはこうある。「バーカーは書いている、非常に迅速かつ徹底的な処理がなされないならば、この 5 年間のすべての我々の仕事が無駄になってしまっている、と。彼は非常に手厳しく書いている」⁽¹⁰⁾。明らかに両者間の意見の隔たりは大きい。その具体的な内容については確認できないが、バーカーには「自治産業コロニー」創設時の理念および原則をなお貫こうとする姿勢が窺える（下記「嘆願書」も参照）。

実は、АИК-К 創設理念にこだわり続けようとしていたもう 1 つのグループ（バーカー、ヘイウッド、ベルグ、マスケヴィチら）が存在していた。なるほど同グループの主張は、リュトヘルスの主導により АИК-К がネップ下の経済発展に沿う制度改変を受け入れることになる激論の中で説得力を持ちえなかった（cf. 第 3 篇, 24）。がしかし、バーカーはモスクワ滞在中の 1926 年 9 月 1 日に「親愛なる同志スターリン」宛に嘆願書を独自に出し、以下のように訴えている⁽¹¹⁾。最初に、1921 年にプロフィンテルン創立大会出席のため訪露し、АИК-К 創設に関わった者としての自己紹介があり、共産党中央委員会書記長スターリンに訴えたのは、以下の窮状である。「ここ最近の 3, 4 カ月間、АИК 管理機関は党中央機関によって前もって決められた方針に反対する完全に他の原理であらゆる合併作業を行った。／手短に言えば、彼らはこの組織〔АИК〕を、いかなる調整も指図もなしに清算しつつあり、コロニー固有の性質を顧慮に入れていない」。末尾で、「АИК の他の構成員とともに私〔バーカー〕は、あなたに、あらゆる委員会または機関に、現状のあらゆる重要性を確認する全事実を提出する用意がある。／参考までに、私は労働運動における私の革命的活動の簡単な評定書を添付し、あなたがこの問題を可能な限り早く検討することを希望する、この組織への関心はソヴェト連邦の範囲をはるかに超え出ているので」とまで記していた⁽¹²⁾。

(8) “Report on Work of American Organization Committee of Kuzbas,” РГАСПИ, 515/1/4296/-16-23; cf. 第 2 篇, 2, 27.

(9) РГАСПИ, 626/1/6/54.

(10) РГАСПИ, 626/1/6/52.

(11) РГАСПИ, 515/1/4307/33-34. 原物はなく、1962 年に露語訳されてタイプライターで清書されたものが保存されている。

(12) スターリンにとっては、たとえ国際労働問題だったとしても、組織を代表してではなく一介の当事者にすぎないであろう者に対して直に回答しようがなかったのではないだ

そのようなバーカーの姿勢に対して、ソヴェト政府関係機関と重要な交渉を病をおして重ねていたリュトヘルスは、「サンディカリズム的〔つまり IWW 的〕傾向」との疑念を抱き、その疑念を АИК-К 存亡の危機に際してもぬぐえなかったと言えよう。

話を少し戻して、ロシアに向けて発とうとしていたバーカーに、リュトヘルスから別の指示が出された。それはリュトヘルスがモスクワ事務所総務責任者フート (B. Foot) に宛てた 1926 年 4 月 21 日付書簡に以下のように記されている。1926 年 4 月 20 日にコロプキン [К.Н. Коробкин; 病氣療養のため帰国するリュトヘルスの代理としてドンバス炭鉱から着任。そのことによって АИК-К は最後に最大の災難に見舞われることになる(後続篇)] が到着して、2, 3 日後に管区に赴く。彼は 5 人〔最終的には 40 人〕の仕事仲間を連れて来た。彼は個人的に知っている優れたロシア人専門技師を得ることができると主張するので、私〔リュトヘルス〕は我々がアメリカとドイツでの〔入植者〕募集をなおさら制限することができると考える。私はバーカーに打電するだろう、彼がモスクワに到着するまで何も企てるな、と⁽¹³⁾。

そのリュトヘルスの代理人となったコロプキンは、現地外国人専門技師との関係をこじらせることになる。オランダ人技師ストライク (A.G. Struik) らは帰国療養中のリュトヘルスにしきりと窮状を訴える書簡を送ることになった。そのような中、7 月時点でコロプキンのアメリカ行計画が現れた。リュトヘルスの考えは以下のように今ひとつはっきりしないが、非友好的関係の解消策を考えていたようだ。「コロプキンには外国人〔技師〕と仲良くする任務がある。彼は一度アメリカに行くならば良いだろう。そこで彼はやる気を得るだろう」⁽¹⁴⁾。

バーカーは 1926 年 5 ないし 6 月にニューヨークを発ち、ケメロヴォに向かい、7 月 12 日には現地のコロプキンおよびゴーロス (Я. Голос; 元ソヴェト・ロシア技術援助協会書記で、現 АИК-К 総務部長) によって署名された以下の証明書を取得している。当該者はレーニンスク〔旧名コリチュギノ〕、プロコピエフスク、そしてグリエフスクの各 АИК-К 企業〔いずれもナジェジンスク工場を移管できなくなった АИК-К が独自に吸収合併し、開拓していった企業〕視察のための公務出張で、関係機関に助力を求めている(有効期限は 8 月 1 日まで)⁽¹⁵⁾。

バーカーの代理人となったシップマンに対して、リュトヘルスは 7 月 24 日に以下のような書簡を送った。①新しい人員を送らないこと、②コロプキンがおそらく 12 月にニューヨークに行くので、諸リストを作成してもらいたい〔これに関しては後述〕。③〔訪露中の〕バーカーが再度ニューヨークに来るやいなや、シップマンに再度ケメロヴォで働いてもらいたい⁽¹⁶⁾。

ろうか。

(13) РГАСПИ, 626/1/6/48-49.

(14) РГАСПИ, 626/1/6/51.

(15) РГАСПИ, 626/1/11/9.

(16) РГАСПИ, 626/1/6/52.

スロヴァキアのピェスタニ (Piešťany)⁽¹⁷⁾ からリュトヘルスがフートに宛てた 10 月 9 日付書簡について「クズバス年譜」には、こうある。バーカーはイギリスにいて、アメリカへの入国ヴィザを得られていない。私〔リュトヘルス〕はロンドンに上陸しているバーカーが、今ソヴェト連邦に戻る事が望ましいとは思わない（彼はロンドンに残り、そこでロシア通商代表部で勤め口を得た）⁽¹⁸⁾。

1926 年 10 月 28 日にシップマンは、上記のリュトヘルスからの要請に次のように返答した。現在の情勢下では労働のためにケメロヴォに行くのは、シップマンにとっていかなる意味もない。バーカーが戻るやいなや、彼にとってニューヨーク事務局ではまたいかなる仕事もないだろう。シップマンは、コロプキンのアメリカ訪問はいかなる具合かを問う⁽¹⁹⁾。この時点でシップマンは、АИК-Кの見通しに対して悲観的に見ている。

「クズバス年譜」1926 年 12 月 22 日の記述のあと以下が続いている。「ニューヨークとベルリンの事務局が清算される。コトリャレンコとフートは辞任し、モスクワ事務局はロシア人ガフト (Гафт; コロプキンの部下) の指導下に入る。……外国における新しい働き手の募集は、事情によってはアムトルグまたはベルリン通商代表部を通じて行われる。技師シップマンは、コロプキンが彼にふさわしい仕事を約束するところを自ら希望すれば、ケメロヴォに来ることができる。……私〔リュトヘルス〕はさらに書く：ピャタコフがニューヨークに来て、シップマンにあらゆる点でピャタコフを手助けすることを願う」⁽²⁰⁾。

末尾の文章は、シップマンのコロプキン訪米に関する上記問い合わせへの回答とみなされ、この訪米は上記コロプキン対策に限定されただけのものではなかったようだ。5 カ月前の 7 月 28 日にシップマンが（モスクワのホテル「リュクス」に宿泊中の）ルート・ケネル宛に送った書簡には、こうある。「私〔シップマン〕が聞かされたのは、以下の報告を確認することだけである。つまり、コロプキンが見物して回り、非常に多くの機械を購入するために他の 2 人の技師とともにこの国を晩秋に訪れるであろう。彼はたぶんクズバスでの作業のための契約をするであろう、と」⁽²¹⁾。その「契約」と上記「諸リスト」を関連づけたガルキナの記述を手かがりに考えれば、アメリカで技師との直接契約を結ぶことが目的の 1 つで、「諸リスト」とはその専門技師（候補？）リストを指し、事務局清算時に新規の名前が載らなかったという⁽²²⁾。いずれにせよ計画はどこまで詰められていたかも不明で、これ以上のことは目下確かめられない。

(17) リュトヘルスは座骨神経痛の治療ため 1926 年 9 月 25 日から 10 月 30 日まで当保養地に滞在していた〔ただし前者の日付については 9 月 21 日に当地から書簡が出されているので確定できない〕。“Verkort overzicht Biografie Ir. S.J. Rutgers en B.E. Rutgers-Mees,” 12, Archief S.J. Rutgers, Map I-1, IISG; РГАСПИ, 626/1/6/58.

(18) РГАСПИ, 626/1/6/60-61.

(19) РГАСПИ, 626/1/6/61-62.

(20) РГАСПИ, 626/1/6/64.

(21) Meeting of Frontiers, 2000, Web Archive, Library of Congress, Digital ID: mtfxph wkm0042.

(22) Галкина, АИК-К, 81.

1927 年 2 月 4 日、シップマンはリュトヘルスに以下のように知らせた。事務局はその翌日〔2 月 5 日〕に清算（閉鎖）される。モスクワは十分な資金を送ってきていないが、しかし少額だけが扱われている。シップマンはアムトルグに就職口を得た。……シップマンは АИК-К についての情報を新聞雑誌に、そして様々な機関・個人に送った⁽²³⁾。

その 1 個人にシップマンがニューヨーク事務所管理者の名で 1 月 31 日に送った告知文を、以下引用する⁽²⁴⁾。

自治産業コロニー「クズバス」は 1927 年 2 月 1 日にニューヨーク事務所の閉鎖を告知する。将来この国における業務は、アムトルグ貿易会社、ブロードウェイ 165、ニューヨーク市を通して取り扱われるであろう。

独立したアメリカ代表の排除は、クズバス諸企業の管理上の特質において徐々に起こった変化の結果である。これらの変化は、ロシア人技術者および行政官を増大する割合で産業中の責任ある地位に据えることに帰着した。このことは、別個のニューヨーク事務所がその目的のために今日まで維持されてきたところの、特別なアメリカ人との接触を確保しておく必要性を取り除いてしまった。／……／……

後半の 2 パラグラフでは、今クズバス「諸企業は繁栄しつつある状態である」と、そのデータが例示されているだけに、かえってシップマンの無念さが伝わってくる。

(23) РГАСПИ, 626/1/6/65.

(24) American Subject Collection, Hoover Institution Archives, Stanford University, Stanford.

おわりに

AOC 清算後、ニューヨーク事務局がリースを代表にして再編された。そのリースが早々と更迭された。それはリースの考えが АИК-К 創設理念から逸脱しすぎ、さらに管理者としての適格性に欠けていたからである。後任となったバーカーとリュトヘルスとの間には、協力関係が直に築かれたけれども、それ以前からの意見対立も依然として続き、そして両者の関係は АИК-К 清算によって終わる。以下、その経過を振り返りながら、問題点をまとめておく。

リースにはニューヨーク事務局代表に着任早々リュトヘルスとの間で書簡のやり取りがあった。それらの中で明らかとなったのはリュトヘルスによるリース批判であり、主な批判点は以下である。

①リュトヘルスは、リースが「追求している政策は全く正しくないと確信している」と言い切っている。特に問題なのは法人化案であり、それは АИК-К を「明確なプロレタリア組織としてよりも、むしろビジネス企業として現れるように」しかなないとみなされた。元々諮問委員会の一員となった「リベラル」な弁護士によって助言されたその法人化案を、リースが受け入れ、それを諮問委員会に提案しようとしたこと、またリースによって再提案された諮問委員会設置自体もリュトヘルスによって原則として反対されていたことを勘案すれば、リースの考えが АИК-К 創設の理念および原則から逸脱しすぎていたことは明らかだ。

②リースは「そのグループ」、つまりアメリカ労働党に加入＝入党しなかった。モスクワの新経営委員会での合意事項であったその加入、しかも「管理のために満足のいく保障を与えることができる」加入をリースが果たさなかったことは、彼がリュトヘルスによって「管理者」として不適格とみなされたことを意味する（その不適格については、バーカーによるリース批判の書簡がヨリ具体的に指摘した）。

さらに言えば、代表の入党は「プロレタリア組織としてのクズバスを滅ぼ」さないと求められていた。確かに「リベラル」というか非政治的立場のリースを代表とすることに、運営上の問題があったのかもしれないが、しかしこの入党要請は AOC の組織運営の基礎であった非党派的态度 (a non-partisan attitude) (第2篇, 16) に明らかに反する（その方針の転換をリュトヘルスはやむをえないと判断したのか、ロシア側の意向が働いたのか等々、目下確かめようがない）。

リュトヘルスは、代表リースを更迭したあと、ニューヨーク事務局の運営をバーカーに任せるしかなかった。その時、両者間の意見の隔たりは大きかった。にもかかわらず同事務局の運営にとって、両者の協力関係は不可欠となっていた。その理由として以下が想定される。

①リュトヘルスは、バーカーの IWW 的思考を（キャルヴァートに対するほどではなく、また正面切ってではないものの）批判してきた。けれども、事ここに至ってバーカーの管理能力⁽¹⁾および彼によるリース批判をリュトヘルスは認めざるをえなかったのではないかと推測される。付言すれば、リュトヘルスら経営委員会がリースに求めたアメリカ労働党への入党を、筋金入りのウォブリー（Wobbly）であるバーカーに再度求めることは、どだい無理な話であつたろう⁽²⁾。

②バーカーもまた、従来からリュトヘルス批判を隠すことなく繰り返していたけれども、AIK-K 事業への契約更新および「何が起ころうとしているかを私〔バーカー〕はほんとうに知りたい」との真相究明への意欲から、彼は後任の代表（管理者）就任を引き受けることになったのではないかと考えられる。

しかしながら、管理者となったバーカーは、（前半期については史料不足のため確認が困難だが、後半期を見る限り）リュトヘルスの運営方針を全面的に支持したとは考えられず、AIK-K 創設の理念と原則をなお貫こうとする姿勢が窺える。

バーカーのヘイウッド、ベルグ、そしてマスケヴィチ宛 1923 年 8 月 15 日付書簡では、バーカーによる辛口の人物評が目立つけれども、それでも彼は前 AOC 委員たちが AIK-K に何らかの貢献をなそうと（リースに対しても）信じていたように見える（以下、要約ではニュアンスが捉えられないので再度引用しておく）。「もしもあなた方〔宛名の 3 名〕が新〔経営〕委員会か、クズバスと関係する活気あるいく人か、どちらかと接触できるならば、あなた方は委員会がコスグローヴ、リース、そして私〔バーカー〕自身を構成員としてクズバスに呼び戻すように提案すべきだ。ムラリも。……スカイラーもまた呼び戻されるべきであり、その呼び戻しは適切な言葉で工夫されるべきである」。

実は、AIK-K 創設理念にこだわり続けようとしていた 1 つのグループ（バーカー、ヘイウッド、ベルグ、マスケヴィチら）が存在していた。確かに同グループの主張は、リュトヘルスの主導により AIK-K がネップ下の経済発展に沿う制度改変を受け入れることになる激論の中で説得力を持ちえなかった。なぜならばリュトヘルスが主張したのは、AIK-K が組織内での「自治」にもとづき、生産の技術的「効率」を可能な限り高めながら、ソヴェト・ロシア経済の復興・発展に貢献することであつたからである（第 3 篇, 24, 39）。

それにもかかわらず、彼らには（バーカーが AOC 活動開始時にキャルヴァートと共著で出した「趣意書」の冒頭の 1 文を借りれば）「利益追求制度下で試みることができない」この国際的な一大社会「実験」に何らかの願望を託すものが依然あつた。彼らと（一部重複するが）前 AOC 委員の大半は、1927 年 1 月 1 日の AIK-K 清算までそれとの関係を断

(1) バーカーは後年 1958-59 年に（旧）セントパンクラス・ロンドン自治区の（労働党）区長となる。Barker, "Lenin Inspired Us," 158.

(2) かつてキャルヴァートとバーカーはモスクワで組織委員会の 1 ないし 2 委員から〔共産〕党への入党を勧誘され、それを断った。そのことにレーニンは同意してくれて、その "non-party" の自由な立場が自分たちの入植者募集事業外の論争を回避するのにある程度役立った、とバーカーは最晩年に回想している。Barker, "Lenin Inspired Us," 161.

つことをしなかった。

バーカーは 1926 年 9 月 1 日に「親愛なる同志スターリン」宛に嘆願書を独自に出し、党および政府機関の関係者たちが АИК-К を「いかなる調整も指図もなしに清算しつつあり、コロニー固有の性質を顧慮に入れていない」と訴えさえした。

そのようなバーカーの姿勢に対して、ソヴェト政府関係機関と重要な交渉を病をおして重ねていたリュトヘルスは、「依然として強いサンディカリズム的〔つまり IWW 的〕傾向」の存在を疑い、その疑念を АИК-К 存亡の危機に際してもぬぐえなかったと言えよう。

結局、両者の意見の隔たりは解消されないまま⁽³⁾、АИК-К 清算とそれに伴うニューヨーク事務局の解散（閉鎖）を迎えてしまう。もちろんその清算および解散は、両者の対立が主因では決してない。主因としては、シップマンによるニューヨーク事務所の閉鎖告知文（1927 年 1 月 31 日付）に婉曲に記されていたように、ソヴェト政府および党の中央ないし地方関係諸機関からの АИК-К への不断の動きかけが決定的であった。

ソヴェト・ロシアに舞台を戻して、その経過を次篇以降で追っていくことにする。

2024 年 9 月 26 日 成稿・初版

2025 年 1 月 31 日 改訂再版

2025 年 9 月 5 日 改訂第 3 版

(3) バーカーの最晩年の回想でも、АИК-К 創設の最大の功労者としてレーニンが史実以上に持ち上げられ、リュトヘルスは後景に追いやられている。1926 年訪露中の大製鋼所建設計画（上記）の記述も、元々リュトヘルスがその発案者であり、彼がバーカーに調査を依頼し、呼び寄せたことも触れられていない。Barker, “Lenin Inspired Us,” 158-163.

The Autonomous Industrial Colony “Kuzbas” and S. J. Rutgers (4):

From the Reorganization of the New York Bureau to Its Dissolution

by

Akito YAMANOUCHI

(Professor Emeritus of Kyushu University)

Based on the new contract between the Autonomous Industrial Colony “Kuzbas” (AIC-K) and the Soviet of Labor and Defense (STO) on 25 December 1922, the meeting of the American Organization Committee (AOC) on 1 April 1923 decided to dissolve itself and its chairman, H.S. Calvert, was to break away from it. Instead, the New York Bureau was reorganized with Th. Reese as representative. M. Mulari, P.P. Cosgrove, and T. Barker, who were no longer AOC members, were retained on a salary. Reese was dismissed so early, because his views deviated from the ideals and principles on which the AIC-K had been founded (“Kuzbas idea,” to use the phrase from Barker’s reminiscences) and, moreover, he was lacking in his competence for the management. Although a cooperative relationship between its successor, Barker, and S.J. Rutgers was established directly, the differences of opinion that had existed before continued, and their relationship ended with the AIC-K’s liquidation. Looking back on the process, the main issues are examined below.

Shortly after Reese took up his post as head of the New York Bureau, he exchanged letters with Rutgers (29 May to 15 August 1923). These letters revealed Rutgers’ strong criticism of Reese’s views and policy, the main points of which were as follows:

(1) Rutgers asserted definitely, “Personally I [Rutgers] am also convinced, that the policy you [Reese] are pursuing is not quite correct.” Particularly Reese’s proposal for incorporating the AIC-K was a serious problem. It was “largely to be considered in connection with the trial and the wish to make ‘Kuzbas’ appear as a business enterprise, rather than as a definite proletarian organization.” Originally the incorporation plan was advised to Reese by a “liberal” lawyer who had been appointed a member of the Advisory Committee, and then was going to be proposed by Reese to the Committee. Moreover, Rutgers opposed in principle the establishment itself of the Advisory Committee which had been proposed again by Reese. It is clear that Reese’s proposals were deviating too far from the “Kuzbas idea.”

(2) Reese continued to avoid joining the “Group,” that is, the Workers Party of America. The joining that had been decided on the Managing Board in Moscow, according to Rutgers, was “not a formality, but an administrative one” and “could give satisfactory guarantees for control.” Rutgers regarded Reese’s dealing with the matter as unqualified for his present position (Barker

pointed out and criticized Reese's unqualifiedness more concretely in a letter of 15 August 1923, addressed to W. H[aywood], S. Berg and J. Masukevich). Furthermore, the demand for the representative's joining the Workers Party was made by the Managing Board, including Rutgers, not "to ruin Kuzbas as a proletarian organization." It might have been a controversial issue from the viewpoint of management to appoint the "liberal," or non-political Reese as representative. But that demand for joining was clearly contrary to "a non-partisan attitude" which had been a basis for the AOC's management.

After the change of representative, Rutgers would have no option but to entrust the management of the New York Bureau to Barker. Although there was a large gap in opinion between Rutgers and Barker, their close cooperation became essential to the operation of the Bureau. The reasons why they could cooperate with each other are supposed as follows:

(1) Rutgers had criticized Barker's IWW thinking from the start (although not as much as he did Calvert and not directly). Under the pressure of necessity, however, Rutgers felt obliged to acknowledge Barker's administrative ability and his criticism of Reese. It goes without saying that it would be out of the question for the Managing Board to demand again a hard-core Wobbly, Barker, of joining the Workers Party.

(2) Although Barker had also criticized Rutgers repeatedly and openly, it is thought that he accepted the position of successor as representative due to his motivation for renewing his contract with the AIC-K enterprise and wanting "to know what is going to be doing." As representative, however, Barker does not seem to have fully supported Rutgers' management policy (although the first half is difficult to confirm due to a lack of historical documents, based on the second half), and he appears to have still adhered to the "Kuzbas idea." In the above-mentioned letter of 15 August 1923 Barker's harsh criticism of his comrades stands out, but he nevertheless seems to have still believed that the former AOC members (including even Reese) would add some sort of contribution to the development of the AIC-K: "If you [Haywood, Berg and Masukevich] are able to make contacts with either the New [Managing] Board or with some of the live folks connected with Kuzbas, you should suggest that the Board recall Cosgrove, Reese and myself [Barker] to the Colony as members. Also Mulari.[M.] Schuyler should also be recalled and the recall should be framed in proper language."

In fact, a group (including Barker, Haywood, Berg, Masukevich) that wanted to stick to the "Kuzbas idea" was being formed. Indeed, this group's arguments were not persuasive in heated debate about whether the AIC-K should adapt itself to the NEP system and carry out some institutional changes, because Rutgers' goal was to contribute to the reconstruction and development of the Soviet Russian economy by increasing the technical "efficiency" of production based on the basis of "autonomy" within its organization (cf. Part 3). But the members of the group still had some hopes for this international social "experiments" that "could not be attempted under the profit-system" (to borrow the phrase from a prospectus, *Kuzbas* written by Barker with Calvert at the start of the AOC's activities). They and most of the former AOC members (with some overlap) never broke off relations with the AIC-K until its liquidation on 1 January 1927.

On 1 September 1926 during his stay in Moscow, Barker even independently submitted a

petition to “Dear Comrade Stalin” and brought the following discontent to Stalin’s attention: “they [those concerned] are liquidating this organization without any coordination or direction, and without taking into account the specific characteristics of the colony.”

In response to Barker’s attitude, Rutgers, who had continued to engage in important negotiations with the Soviet governing bodies despite his illness, suspected that there still remained “the still strong Syndicalist [i.e., IWW] tendency” in it and it can be said that Rutgers was unable to dispel this suspicion even when AIC-K was in danger of extinction.

In the end, the differences of opinion between the two parties remained unresolved, and the AIC-K was liquidated, leading to the dissolution of its New York Bureau. Of course, the conflict between two parties was not the principal cause of the liquidation and dissolution. A determining cause was the constant pressure on the AIC-K from the outside, that is, the central and local organs of the Soviet Government and the Russian Communist Party. The result of the constant pressure was expressed euphemistically in a notice of the dissolution of the New York Bureau written (on 31 January 1927) by S.S. Shipman who had been appointed by Rutgers to succeed Barker, just before Barker’s leaving for Russia: “The elimination of an independent American representation comes as a consequence of gradual changes in the character of the administration of the Kuzbas enterprises. These changes resulted in the placing of an increasing proportion of Russian technicians and administrators in responsible positions in the industries. This has done away with the necessity of retaining the special American contacts for which purpose a separate New York office has been maintained up to the present time.”

Key words: Autonomous Industrial Colony “Kuzbas,” American Organization Committee, New York Bureau, H.S. Calvert, Th. Reese, T. Barker, S.S. Shipman, S.J. Rutgers